

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370800211		
法人名	特定非営利活動法人明成会		
事業所名	グループホーム おらほの家		
所在地	〒028-0526 岩手県遠野市下町組11-49		
自己評価作成日	令和5年8月26日	評価結果市町村受理日	令和6年2月5日

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所は、住宅地の中にあり、「笑顔あふれる第二の我が家」を基本理念に掲げ、自分の家と同じ様に過ごせるように日々のケアに取り組んでいます。地域の自治会に加入して班長やお祭りへの参加などを利用者とともに進めています。コロナ禍で、お祭りへの参加は数年できなくなっていますが、地域の皆さんからは声をかけていただいています。地域で暮らす事を続けていけるように取り組んでいきたいと思っております。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action\\_kouhyou](https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou)

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所理念として「笑顔あふれる第二の我が家を中心に、家庭的な環境のもと日常生活を通じて、安心と尊厳のある生活を営むことを支援していく」を基本に、利用者が「自分の家と同じような生活ができる」ことを目指して、積極的な生活支援に取り組んでいる。地域自治会の活動にも、地域班長としての役割を担い、清掃活動やの地域祭りに職員が参加するなど、積極的に関わっている。また、日常的に近所の方からの挨拶、野菜の差し入れ、隔月に広報誌「おらほの家」を回覧など、地域に溶け込み住民として受け入れられている。運営推進会議では、福祉や介護に識見豊かな方々がメンバーになっており、活発な意見交換や情報提供をいただいている。また職員からの提案で、入浴リフトの設置やホールの畳の撤去等、利用者視点からの改善を図っている。今後はコロナ禍に注意しながら、ボランティアの受け入れの復活や外出の機会を増やして行きたいとしている。

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年11月30日

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を「笑顔あふれる第二のわが家」として、笑顔で楽しく過ごして頂ける生活作りを目指している。年度初めに理念についての研修会を行い、職員は生活そのものがリハビリにつながるものと認識し、料理や掃除など利用者で行うようにしている。	事業所理念「笑顔あふれる第二のわが家」をもとに、利用者が家庭にいた時に何をしていたのか、本人がどれだけの調理や生活が出来るのかなどを見極めながら、その人らしい日常が送れるよう介護の実践に努めている。年度初めに理念についての研修会を実施するほか、新しい職員にはその都度理念を説明をしている。職員は日々ホールに掲載している理念を共有しながら支援に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し班長の活動や清掃活動等に参加している。広報「おらほの家だより」を隔月で行政区内の回覧板でお知らせしている。コロナ禍でお祭りへの参加は中止になっているが、普段の挨拶やお声かけは続いている。	事業所は下組長自治会に加入し、班長活動や清掃活動に参加しながら、顔なじみになっている。普段の生活の中で、地域の方々の挨拶や声掛け、野菜の差し入れなどもあり、地域の一員として生活している。事業所の広報誌「おらほの家だより」を隔月毎に行政区内に回覧し、事業所の様子をお知らせしている。コロナ禍前は、祭りへの参加やボランティアとの交流も沢山あったが、出来ない状態が続いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域へ「おらほの家だより」を回覧し、グループホームの活動内容や季節に応じた情報を提供している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	隣接のグループホームと合同で2ヶ月毎に開催している。入所者の活動や取り組みの様子を報告している。推進会議の委員の方からは地域の情報提供を頂いたり事業所への質問や助言を頂いている。	運営推進協議会は、対面開催を基本とし、隣接のグループホームとの合同で2ヶ月毎に開催している。入居状況や行事、運営状況の報告を行い、委員からは地域の情報提供や意見をいただいている。家族の参加もコロナ禍が落ちついたなら考えてみたいとしている。会議録も記録され、職員間で共有している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議で市の職員に利用者の状況を報告している。困難事例がある時には、相談をするようにしている。	運営推進会議委員に市の健康長寿課職員が(地域包括センター職員の代わり)参加することもあり、地域の情報をいただき、事業所からは利用者の活動や取り組み状況を報告をしている。事例等への助言や指導をいただくなど、相互の関係性は出来ている。地域包括支援センターの職員とは、入居の紹介もあり、直接伺うなどして円滑に連携が図られている。	

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年4回の身体拘束廃止委員と年2回の職員研修を行い、身体拘束ゼロに向け取り組んでいる。職員間で気になった事や気づいた事は情報を共有し、具体的な行為ごとの工夫を検討し取り組むようにしている。	年4回身体拘束廃止委員会を開催し職員研修は年2回実施して、拘束の廃止に向けた取り組みを行っている。スピーチロックについても、朝礼や研修会で取り上げ、職員の気付きに繋げている。スピーチロックが見られた時には、管理者は原因を聞き、ことばの言い替えて話すよう指導している。転倒防止のため、利用者1名が家族の了解のもとでセンサーマットを使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	研修会を定期的に行い、今年度は「虐待の芽チェックリスト」を実施し、その後各項目について職員が交代で担当し日々のケアを振り返りながら、改善できるように研修を行った。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、成年後見制度を利用した利用者がいたため、研修会を行ったり、市などの関係職員より説明を受け理解に努めた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約内容、重要事項説明書、勤務体制や事故発生時の対応等について丁寧な説明を心がけ理解していただけるように努めている。解約時は家族、管理者他担当者と十分な協議をしておこなっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の中には、自分の思いを上手く表現できない方もいるので、表情や声をかけた時の様子などから把握する様にしている。家族の面会はコロナ禍の前より減っているが来所時や電話があった時には、近況を伝えながら家族の要望や思い、相談事を把握できるように努めている。	コロナ感染症の流行に加え家族が遠方にいる事もあり、家族との面会が少なくなって来ているが、来所の際には要望や意見を伺うよう努めている。月末に利用者の様子を居室担当者が手書きで家族にお知らせしたり、電話での近況報告の際に要望を伺ったりしている。家族からお礼の電話が居室担当者であり、職員のモチベーション向上にも繋がっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回「スタッフ評価シート」を用いて各職員が自己評価と管理者評価をし、それをふまえて施設長と個別面談の行い要望や意見等を話せるようにしている。ケアでの悩み事も相談できている。ミーティング、申し送り時にも気づいたことや提案事項などが上がり反映できるように努めている。	管理者は、日常の業務や朝の申し送り時、または月1回のスタッフミーティングの際に努めて職員から要望等を聞いている。職員の提案を受け、入浴リフトの設置やホールの畳を撤去し利用者スペースを広くするなど、事業所運営に反映させている。年2回、「スタッフ評価シート」で職員それぞれが自己評価と管理者評価を行い、それを基に施設長との個人面談を行っている。職員と管理者とは、お互いにコミュニケーションの取れる関係性を築いている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、面談の機会を設け、勤務の状況や要望などを把握している。日常的にも話をする機会をもち、職員の頑張りを認めていると思う。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員全体の研修会を設けている。職員が交代で講師をし、他の職員に伝える為に学習するため理解を深める機会となっている。外部の研修を受け資格取得ができるように勤務の調整をしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍後は、控えているが市内のグループホーム合同での研修会や親睦会を行っていた。職員同士が顔なじみになったりと交流できていた。情報交換の機会になっていたため、今後、再開できればと思う。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に本人と家族と一緒に面談し、本人の思いや入所までの様子を把握する様にしている。入所後は、本人の様子に合わせて声がけを多く持つようにし、安心して生活できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所の申し込みの時から家族の困っていることなどを聞き取り、入所の際にも事前に家族との面談をし、支援の為に必要な事や施設での対応の仕方など相談しながら進めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族との面談や関係機関からの情報提供等で入所への希望を把握する。入所により起こりえる事など段階的に相談していく。家族の希望によっては他のサービスの情報提供や利用申し込みの支援をする。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事など利用者と職員と一緒に出来る事を行い、個々の得意な物や経験を活かせる場面作りや、教えて頂いたりしながら共に支えあう関係作りに努めている。利用者との会話を多く持ち、本人をより理解出来るようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月本人の近況を担当職員から手紙で伝えている。面会時や電話等で連絡を取る時にも日頃の様子を伝えている。本人と家族が電話や手紙で交流出来るように支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者が出かける事は少ないが、面会に来られた時は感染防止に努めながら、短時間だが面会をして頂いている。2か月毎に来る美容師さんとは世間話などを楽しめている。友人からの手紙の交流が続くようにはがきの購入や投函など支援している。	利用者は出かける事が少なくなってきているが、馴染みの友人が来所した時には、短時間の面会を楽しんでいる。友人からの月1回の手紙に返事を書いたり、また利用者自身の馴染みの理容室には家族が連れて行っている。2か月毎に来所する美容師が馴染みとなっている。職員は馴染みの人との関係性の維持に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者間の相性等を配慮しながら、席替えを行ったりお互いに良好な関係が傷けるように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	別の施設に移られた場合や、入院中の相談などその都度対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人一人の思いを表情や行動、会話などから把握し、職員同士で情報を交換し、ミーティング等で話し合い本人の思いに近づけるようにしている。	利用者の思いを伝える事が難しくなり、入居前のアセスメント情報を参考にしたり、利用者一人一人に寄り添いながら、本人の表情や仕草を読み取り、思いや意向の把握に努めている。日々の生活での会話を大切に、職員間で共有を図りながら、利用者の思いに近づける生活支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族、関係機関からの情報提供等で把握し職員間で共有する様にしている。入所後も本人との会話などや家族からの情報を得るようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	時間を追って様子を記録し、体調や過ごし方を把握する様にしている。気になる点は次の勤務者に申し送り様子を観察している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族の思いを把握しながらケアプランを作成する様にしている。毎月のモニタリングは各職員で1から2名担当し、ミーティング等で検討し出された意見等をプランに反映できるように努めている。	入居前のアセスメント情報(本人、家族、関係機関)や、把握した本人の思いを基に、計画作成担当者がケアプランを作成している。居室担当者がモニタリングを行い、毎月のミーティングで検討してプランに反映している。プランの見直しは3か月毎を基本に、変化の見られない時には6か月毎に作成している。家族からの承諾は、郵送や来所した際にいただいている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の様子や、ケアの中で気づいた事や、本人の言葉や表情など記録に残し職員間で情報を共有できるようにし、モニタリングの時など見直しの時に活かせるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の状況にあわせて、必要なサービス等は関係機関などから情報を得るようにし、サービス利用につなげられるように努めている。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	かかりつけ医への通院の継続の為の支援や定期的に来所して貰う美容師との会話などを楽しみにしている。コロナ禍で控えているがボランティアの受け入れやお祭りへの参加などを行っている。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からの主治医に継続して受診している。通院には、家族や職員が同行し、普段の様子や相談したいことを伝えている。2ヶ月ごとに訪問診療を利用している利用者もいるので、受診後は家族に連絡し、職員間でも情報共有している。	利用者は、入居前のかかりつけ医を継続して受診している。医療機関への受診は、利用者家族や職員が同行している。家族同行の際は、バイタル表を持参し利用者の様子を主治医等に伝えている。訪問診療を利用している利用者もいるので、結果は家族及び職員間で共有をしている。利用者の体調の変化については、看護師資格を持つ管理者に、職員がその都度連絡する体制が出来ている。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が日勤者の中に入っているため、日頃の健康状態や身体状況の把握に努めている。体調不良時や急変時には、連絡し指示をもらう体制になっている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院した場合は、病院へ入所中の様子を情報提供し、家族と一緒に病状説明を受けるようにしている。早期に退院できるように病院関係者から情報を得るようにしたり、連絡を取るよう努めている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に、重度化した場合や終末期について家族に説明し、状態の変化に応じて家族の意向を確認しながら支援していくことを伝えている。現在まで看取りの経験はないが、主治医、家族の協力を得ながら取組んでいけるように、研修会など取組めることを行っている。	重度化した場合や終末期の支援について、入居の際に家族等に説明し、理解をいただいている。看取り経験はないが、体調の変化に応じ、事業所と医師、家族と連携を図りながらチームで支援出来るよう話し合っている。要介護3になった時点で家族には、特養申請の相談もしている。年2回ターミナルケアの研修を実施し、これからの取り組みについて学んでいる。	職員体制の充実を図り、医師等から看取りに係る研修を受けながら必要なマニュアルを作成し、医師や訪問看護ステーション等と連携した看取りの体制を整えられることを期待したい。	

事業所名 : グループホーム おらほの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	研修会をもち、緊急時に対応できるように努めている。職員からは、もしもの時は不安だという声があるので研修会等を続けていくようにする。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災を想定した避難訓練を年2回実施し、年1回は消防署の立ち合いで行っている。運営推進会議で避難訓練の様子を報告している。	年2回の火災想定での避難訓練を実施し、そのうち1回は消防署立ち合いの下で行っている。事業所は、水害区域に指定され市の福祉の里への避難を想定しているほか、地震発生時の被害の状況によっては、隣接の別家へ避難することとしている。災害備蓄品として、食料品、飲料水、缶詰類を3日分保有しているほか自家発電も整備しており、概ね1週間に対応できるとしている。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は利用者一人一人の尊厳を守るように、声かけを工夫したり、入浴やトイレへの誘導時などの声かけも、「お手伝いをお願いします。」などほかの利用者に気づかれないように工夫している。	職員は、利用者に対して人生の先輩との意識を持ちながら、敬いの気持ちで接するよう心掛けています。トイレ誘導の声かけも、他の利用者に気付かれないよう「お手伝いをお願いします。」などとしている。職員の馴れ合いの言葉遣いが気になる時もあるので、その都度、管理者から指導するなど、職員間でも気配りしながら利用者支援に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中で献立やテレビ番組、日中の活動等希望を聞き取り、取り入れるようにしている。希望を表せない利用者もいるので、表情やしぐさ等から汲み取るように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	それぞれの利用者の様子や希望等に配慮しながら、支援できるようにしている。「どうしたらいい？」ときかれる事もあるので興味のありそうな事をすすめたりしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節に合わせた服装が出来るように支援している。髭剃りや髪を整えるなど声をかけたり支援している。好みのクリームの購入やカットの時には、美容師に希望の髪型を伝えるなどしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の下拵えを一緒に行ったり、料理の作り方を教えられたりしている。正月やお盆、他の行事食などは希望をきき、お赤飯やお煮しめなど楽しんでもらえるようにしている。	以前に栄養士が在籍していた頃の献立を参考に、所長が立てて、週3回職員が交代で買い出しに出かけている。朝食は夜勤者、昼食は早番、夕食は遅番が交代で調理を担当している。利用者の希望するだんご、饅頭、お肉料理などを献立に取り入れながら提供している。行事食(正月、ひな祭り、お盆、敬老会、誕生会、開所記念日)には、赤飯やちらし寿司、クリスマスにはケーキ等を提供し、喜んでいただいている。利用者は下拵えなど、出来る事を手伝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の食事摂取量を確認し、体調などにあわせて量や水分にとろみをつけるなど、形態を工夫するようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後個々にあわせ、声掛けや介助をしている。口腔ケアが健康上重要であると職員が理解し支援している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人の排泄を日誌にチェックし、個々の様子に合わせてトイレでの排泄が出来るように、適時誘導を行っている。誘導する際は、さりげない声かけで羞恥心に配慮するように努めている。	利用者個々の排泄を把握して、日誌に記録している。時間を見ながら個別にトイレ誘導をして、可能な限りトイレでの排泄支援に努めている。誘導の際には、さりげない声掛けをし、利用者の羞恥心に配慮している。オムツ使用者はおらず、1名が布パンツ使用で自立している。今の状態の維持に努めながら支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分や牛乳(ヨーグルト)食物繊維を取れるようにしている。便秘が酷く毎日下剤を服用していた利用者が主治医と相談しながら下剤を調整し、段々に下剤の量や回数を減らすことが出来ている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそうした支援をしている	入浴は週2回位で、ゆっくり入浴できるようにしている。入浴リフトを設置してからは、車イス利用の方や浴槽をまたぐことが困難方も安心して入浴が出来ている。入浴中は、利用者と一緒に会話できる時間でもあり、いろんな話で楽しんでいる。	入浴は、利用者1人が週2回、月、水、金が午前と午後、火、土は午後のみ入浴となっている。夏場はシャワー浴も取り入れている。入浴リフトを取り入れた事で、車椅子利用者も安心して入浴が出来ている。入浴を嫌がる人はいないが、午前は嫌なら午後という柔軟な対応をしている。入浴中は利用者と1対1のコミュニケーションを図れる場となっている。	

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を通して夜間眠れるように生活リズムを整える事を大事にしている。日中でも眠そうな時や疲れているような時は自室で休めるように声をかけたりしている。居室内の照明や温度、寝具等安眠できるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	各利用者の服薬状況を把握する様にしている。内服薬に変更があった場合は職員間で情報を共有し服用後の様子観察をし、変化のあった時は主治医に相談している。薬の形態についても主治医に相談し本人の服用しやすいものになっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で、楽しみやできる事を探すようにしている。一緒に家事を行ったり、折り紙や塗り絵をしている。コーヒータイムや外気浴、ドライブなど希望にあわせて支援する様にしている。また家事などを手伝って貰った時には感謝の気持ちを伝えるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で、外出の機会はずすくなっているが、桜や紫陽花、紅葉などドライブ出かけ、季節を楽しんで貰うようにしている。馴染みの床屋さんに家族の支援で出かけている。玄関先の椅子で、外気浴を行っている。	コロナ禍の流行前は、地域のお祭りに出かけたり、保育園からの誘いがある見学に行く事もあったが、今は交流もなく、外出の機会も少なくなっている。春や秋にはドライブしながら桜や紫陽花、紅葉を見に行くなどの外出支援に努め、利用者からは気分転換になり喜ばれている。天気の良い日は玄関のベンチに座り、花壇の花や近くの高速道路を見たりしながら、外気浴を行っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入所時に家族と相談し、1名お金を所持している。お孫さんの面会時、渡す事を楽しみにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	週1回、家族から携帯電話にかかってくるが、一人では出れないので、支援している。友人と手紙のやり取りをしている利用者には葉書や切手の購入や投函の支援をしている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム おらほの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	建物の真ん中にリビングがあり、花や季節の飾り付けをしている。廊下の壁には、利用者の行事の時などに撮った写真を貼って自分の顔を見つけて笑顔になったり、会話のきっかけになっている。利用者が作った折り紙や塗り絵を飾っている。日中夜間の温度調節や採光に注意している。	共用のホールは、パネルヒーターで暖をとり、夏はエアコンで適温調節をしている。テーブルが3台あり、テレビ、ソファが置かれ、壁面には行事の時の写真や折り紙、塗り絵が貼れている。空間には装飾(クリスマス)も飾られ、季節感を感じられるようになっている。天井には明かり取りもあり、光が差し込むようになっている。利用者は思い思いの場所で過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士の交流が持てるようにテーブルの配置などを工夫している。自分の好みのいすやソファで過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、家で使い慣れた物や家具を持ってきてもらい、本人の使いやすさを相談しながら配置している。家族の写真や思い出のある人形などを飾っている。	備え付けのものは、エアコン、パネルヒーター、ベッドで、衣装ケース、椅子、ハンガーラック、利用者の亡夫の遺影などを持ち込み、こけしや家族写真を飾っている方もいる。居室のレイアウトは、本人が居心地よく過ごせるよう、入居の際に来訪した家族と一緒に置き場所を決めている。居室の入口には、利用者が迷うことのないように名前が書かれたプレートが吊るされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物 内部に段差はなく、動線に配慮してイスや手すりを設置している。居室には表札をつけたりトイレの表示を付けている。		